

フランス世紀末文学叢書 XI

ニキーナ

—ヴェネチアの娼婦の物語—

ユーグ・ルベル

田中義廣 訳

フランス世紀末文学叢書⑭

ニキーナ

定価 三九〇〇円

一九八五年二月一日 初版第一刷印刷

一九八五年二月二〇日 初版第一刷発行

訳者 田中義廣

発行者 佐藤今朝夫

発行所 株式会社国書刊行会

東京都豊島区巢鴨三―五―一八

電話 〇三(九一七)八二八七 振替東京五―六五二〇九

印刷 セイユウ写真印刷株式会社

製本 大日本製本株式会社

Hugues Rebell
La Nichina

ニキーナ

＝ヴェネチアの娼婦の物語＝

ユーグ・ルベル

田中義廣 訳



口繪選定「遊澤龍彦」
装幀「山下昌也」

目次

プロローグ 小さき兄弟修道会	一三
第一部 純情時代	三三
第二部 恋愛修業	二九
第三部 ニキーナの情熱	二五
エピローグ ムラノの庭園にて	四七
訳者後記	四九

アルノルト・ベックリン 《春の讃歌》

ニキーナ

フロレンツォ・ヴェンド
ミンの未出版の回想
ニキ
ー
ナー
ー
ヴェネチアの娼婦の物語

モーリス・バレスに

ティエポロのヴェネチアにつ
いての名文に対する感謝のし
るしとして、美学の教授連や
プロテスタント道徳には忌わ
しく思える、より古きヴェネ
チアの見事な描写に感謝して。

H・R

幸いなる魂よ

熱情と憤怒に燃え

なんじらは力をふりしぼり

敵と味方の血潮で

大地と海を染め上げた

——セルバンテス

プロローグ 小さき兄弟修道会

これからお話するのはマダム・ニキーナの半生の物語である。彼女はかつては美しく、そして現在は徳高い女性である。もつとも、その身体と顔はいまだに昔いたしえの輝きをとどめており、その気さえあれば悪魔であろうとも誘惑できそうなのだが。

誉れ高きヴェンドラミン家の末裔であり、貴族でもある小生が、たとえ悔い改めた娼婦とはいえ、娼婦の一代記を書くことになろうとは夢にも思わなかった。そして復活祭の最後に小生の身に起こった災難がなかったら、あれほどヴェネチアの人々に魅惑と思ひ出を残したこの女の名前さえ忘れられないに違いない。

小生は、夕暮れ時にキオッジアから戻ってくるところであった。穏やかな空と波静かな海、そして小生の愛するヴェネチア、その夕映えに照らされた建物の壁や塔の鮮やかな色調に心からの喜びを覚えていた。ヴェネチアが暗い海から真紅の姿で浮かび上がったその夕暮れほど、この古い町が素晴らしく思えたことはかつてなかった。ただし、小生の生れ故郷の町がこれほどいとおしく思えたのも、愛するカルローナが居ればこそである。

この娘は、優しさから怒りへと急激に変化する眼差しと、自然の賜物である北方風の純白とバラ色の肌によって、すっかり小生の心を征服してしまった。今宵の熱い抱擁と官能を想うと小生の心はせきたてられ、船の歩みを急がせた。

やがてすっかり夜が訪れた頃、ゴンドラはヴェネチアに到着した。恋人の住んでいる、サン・ジヨヴァンニ・クリズストモ運河に入り、すぐに彼女の家の前に来た。明るい窓には二つの人影が見分けられた。うかつにも、小生はカルローナが女中を相手に小生の帰りを待っているものとしか思わず、いつも身につけている鍵で運河に面した扉を開け、ゴンドラを帰らせて、家の中に走りこみ、一気に恋人の部屋まで駆け上がった。

ああ、なんとという光景が小生を待ち受けていたことか。たとえ死神が突如小生の前に姿を現わしても、この光景ほど残酷には思えなかつたろう。まるで小生の恥辱を照らし出すためにわざとそこに置かれていたように思える燭台の光で、からみあつた二つの肉体が、小生を夢中にさせたあの裸身が見えたのだ。小生が陶酔を期待していた唇は他の男の唇にびったりと合わり、小生の歓喜の源であるその腕は、ひどく醜い——こんな時ものごとをはっきり見定めることなどできないので、実際に見たというよりそう推測したのだが——男をひしと抱いていた。小生の脚はぐらつき、心臓はこわれんばかりに高鳴り、唇は麻痺してかさかさになった。この恐ろしい苦悩の瞬間にあらゆる生命エネルギーが小生から脱け落ちたように思えたが、やがていやおうなく生氣が蘇り、復讐を叫んでやまなかつた。やつらは愛撫に夢中になっていたので、小生が近づくと足音に気づかない。小生は手近にあった椅子の脚を把み、憎むべき二人に向けて全身の力をこめて投げた。二つの叫び声が上がった。ひとつの身体は床にころげ落ち、ひっくり返りざまに燭台を叩き落とし消してしまった。その時だった。小生は暗闇の中で胸に激しい一撃を受けた。小生もすぐに仕返しをしたが、カルローナの胸に当たった。小生

は彼女にとびかかり、悲鳴もかみつきも、小生の皮膚にくいこんでくる爪もものともせず、彼女が氣づかないうちに開け放たれた窓の方に引きずっていった。それからいきなり身をふりほどいて、素早く身をかがめ、彼女の足を持ち上げ、カルローナが小生の意図に氣づく前に、運河に突き落とされた。後ずさりすると足が間男にぶつかった。しかし、呆然自失になっていたためか、それとも椅子が急所に見事命中したためか、この哀れな男は小生が触れたことに氣づかないようだった。男はシュークルット(ドイツやアルプス地方のキャベツ料理)とビールで肥ったドイツ騎兵みたいに重かったが、小生は胴をかかえて不実な恋人と同じく窓外放出の刑を与えた。小生の恋仇を呑みこんでゆく水しぶきの音の何と心地よかつたことか！

すべてが収まると、小生は部屋を出、運河に通じる戸口で流しのゴンドラを待った。まもなく、しじまの中に「ゴンドラ、ゴンドラ」という声が響きわたる。小さなランタンをかがげてゆっくり進む舳へまきが見えた。

「サン・フェリーチェまで行ってくれ」と小生は船頭に告げた。船頭は小生の幸せそうな顔つきを見て、にやりと笑い、意味ありげな目くばせをした。小生が逢引に行くところだと思つたに違いない。「お相手はたいそう美しい方の方ですな。だんなのうれしそうな様子でわかりますぜ」

「そうだよ」と小生は答えた。

小生はトルコの全艦隊を打負かしたかのように勝ち誇っていた。その時はじめて復讐のもつ無上の歓びを理解したのだ。サン・フェリーチェの広場に着くと、狭い路地をたどり、友人のリエロ・デ・チュッコの家に行った。長い間扉を叩いたが返事はなかった。引き返そうとしたその時、まともに服を着ていないリエロが香水の匂いをぶんぶんさせながらドアを開けてくれた。愛想は良かったが同時にうんざりしたような様子をしていた。